

2も作だ 人生は!!

公式サイト日本語版制作
河上和文さん(57) 下

モーツァルト(1756~1791年)、このとてつもない天才作曲家に「はまってしまった男」がいる。国際モーツァルトウム財団のホームページを日本語に翻訳、さらに独自の別サイトでコンサート情報などを提供する河上和文さん(五七)「マーケティングサイエンス(株)経営、京都府京田辺市在住」だ。翻訳料などの費用は持ち出し、収益はゼロ。まさに「献身的な愛」だが、火がついた心は、さらなる深奥を求めてやまない。

一番好きなのは僕!!

90年代初め、ちょうど没後200周年過ぎに「モーツァルトの音楽は、生物を生き生きさせる力がある」という説が世間を騒がす。経営する会社が行き詰った河上さんも、「モーツァルト百貨店」と銘打つ新事業を企画する。

準備に金も労力も注入しながら、モーツァルト百貨店構想に「事業にするには至らない」と結論を下す。モーツァルトのメロディーが生物を活性化するという説に最後まで確信が持てなかった。あいまいな考えて「モーツァルトの名前を使うのは失礼だ」との思いも決断を促した。

一方で、その後3人で始めた、美術画像の配信に画期的な力を発揮する「画像拡大ソフトの開発」が軌道に乗る。株式の上場にごきつけ経済的な問題を解決した。まさに捨てる神あれば拾う神ありだが、モーツァルトへの「無償の奉仕」に至るまでには、また幾多の神の善配が重なる。

河上さんは何回か、こういふふう自分に語った。「僕のように弱い人間は、勝手に何かに因縁を見つけ、それにこじつけるように人生をすり抜けているだけです」と。謙遜では

1枚の切符が導く運命



モーツァルトの歌曲をDVDで鑑賞する河上さん(京都府京田辺市)撮影・中辻和良

あつても、自分をどう納得させて前へ進むかは、その後の人生を左右しかねない。

道筋を分ける発端は、株式を上場する01年12月の一月前の健康診断だった。医者に「今日来てよかった」と言われる。高血圧症だ。「(会社)の机は置いておく」と言われ休暇を取った。先が見えにくくなる中で、最後のお願いを一つかなえてもらおうと、モーツァルトの誕生日(02年1月)にザルツブルク旅行を決める。

誕生月にちなんだモーツァルト週間の盛大さは想像を超えた。演奏会の切符は1枚もなかった。必死に尋ね歩いた。モーツァルト広場でやっと1枚出てくる。この1枚に運命的なものを感じた。刹那(せつな)的な感情だが、逆に1枚の切符にかけた当時の心境と、出てきたときの喜びが想像出来る。

帰国した河上さんは事業の発想を

転換する。「お金は事業を運営する手段で、事業の目標はモーツァルトのために何かをすることだ。お金があるのなら直接目標に向かえばいい」。会社も辞し、モーツァルトに専念する。最初に手をつけたのが、財団ホームページの日本語版制作だった。

外注の翻訳料や諸費用は自前。収益は一切ない。30数年、仕事とは「何かを生産し代償を得ることだ」と考えてきた。割り切ったつもりだが、本位ではない居心地の悪さは残る。

「でもね」と、河上さんはふっ切ろうとする。「居心地の悪さは、僕が我慢すれば済むことですから」と。そして次なる目標を語る。「魔笛って曲があるでしょ、本当は魔法の笛なんです。タイトルの日本語訳を検証したいんです」。

モーツァルトファンは、誰もが「一番好きなのは僕だ」と言い張るそう。河上さんは笑った。

(本宮良)